

チェルノブイリ通信

<http://www.cher9.to/tusin.html>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒811-3102 福岡県古賀市駅東2-6-26-203
TEL/FAX: 092-944-3841
E-mail: jimu@cher9.to



チェルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.
104

山田英雄さん講演会レポート

CONTENTS

チェルノブイリ原発事故から30年、福島原発事故から5年 ～専門家から見た、汚染地域での医療支援活動～ / 渡曾泰彦先生講演会のご案内 / 支援者のお名前とメッセージ / 事務局からのおしらせ / 編集後記



陽だまりに感じる希望の光

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

郵便振替口座 01770-1-65328
楽天銀行 ジャス支店 (支店番号201) (普) 7017104
住信SBIネット銀行 法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416



本紙はCMNの活動を支援してくださっている皆さまへお届けしています。また団体ウェブサイトでもPDFファイルにてご覧いただけます。送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

山田英雄さん講演会

チェルノブイリ原発事故から30年、福島原発事故から5年
～専門家から見た、汚染地域での医療支援活動～



2016年8月20日（土）、グリーンコープ共同体とチェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）との共催で、山田英雄さんの講演会を開催しました。

第1部は、長年ロシア語医療通訳・コーディネーターとしてチェルノブイリ支援に携わってこられた山田英雄さんの基調講演、第2部は、グリーンコープ共同体理事の熊野千恵美さん、CMN理事の河上を交えてのトークセッションというプログラムで、これまでの活動について各々が思いを語りました。

●第1部：山田英雄さん基調講演

1953年頃から、アメリカ、ソ連、中国、イギリスなどで核実験が行われました。アメリカではお母さんの母乳から放射性セシウムが出て、反核運動が高まりました。一方ソ連では、経済情勢が非常に苦しくなっていました。そうした中アメリカのアイゼンハワー大統領は、原子力の平和利用＝Atoms for Peaceという考え方を提唱しました。すなわち原子力は豊富な電力を供給し、農業や医療にもそのエネルギーが使えるというものです。これはヒロシマ・ナガサキのような悲惨な核被害を、平和的にも使えるということです。また核の独占が不可能になり、

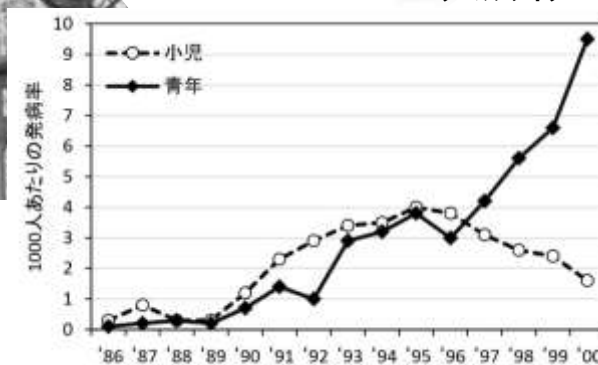
広島・長崎への原爆投下という負のイメージを払拭し、西側友好国に指導力を持つため、アメリカは自国の原子力技術を友好国にも提供するという積極的な外交を行いました。こうした過程で原子力は軍事目的と平和目的がはっきり分かれた使い方がなされるようになりました。

そして1957年にIAEA（国際原子力機関）を設立して、国際的な管理の下に原発を開発していこうという意見で一致しました。その後、1963年8月に大気圏・水中での核実験が禁止され、ソ連ではザゴールスキーの第十二番研究所で、放射性ガスを噴出ししない、地下溝での堅穴式

核実験のモデルを確立して、アメリカとの交渉にあたります。

ベラルーシには6つの州があります。首都のあるミンスク州、非常に汚染されているモギリョフ州、CMNが拠点とするブレスト州などです。南がウクライナで、チェルノブイリ原発事故はベラルーシとウクライナの境目の辺りで起こりました。

広島の場合、原爆投下後2～5年の間で白血病が出ました。そして約5～10年して甲状腺癌（がん）が出ました。そして10～20年後に乳癌、肺癌、胃癌、結腸、骨髄腫が出てきました。今以て白血病は被爆者の



図①: チェルノブイリ原発事故後の小児期と青年期の甲状腺癌

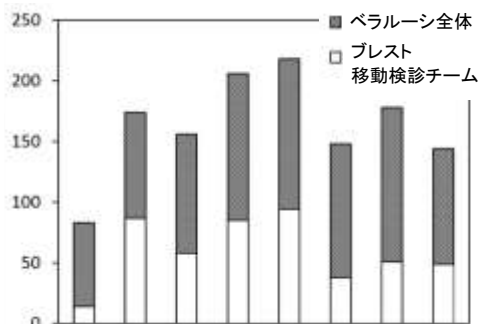
中で数が多くなっています。そのため、1989年に広島の特任専門家とともにチェルノブイリ被災地へ行ったときは、まず白血病が問題になるだろうと考えていました。

ところがロシアでは1990年頃からは、甲状腺に今までに見たこともないような結節を持つ子どもが見つかり始めました。次にベラルーシで1991年ごろから同じ症状が見られました。当時現地の医師たちは、詳しい検査をしないまま甲状腺の摘出手術をしようとしていました。事故から10年経った頃のことですが、甲状腺からリンパ節に癌が転移するケースもあり、その転移した癌も切除しなければならぬので、どうしても手術の

傷口が大きくならざるを得ない。また、子ども用の手術器具(皮膚を広げる鉗子)がなく、さらにまともな切れるメスがなく、電気メスもないので傷口が非常に粗くなりました。この傷はチェルノブイリネックレスと呼ばれています。

こうした状況を変えるためには、手術前に穿刺吸引(注射器で甲状腺のしこりや結節に針を立てて細胞を吸引)をして、それを染色して診断をつけることが非常に大切だということです。そこでCMNでは、この診断を現地の医師たちが行うことができる環境整備を目指し、ブレスト州にて活動をスタートさせました。

1986年の事故から4~5年で小児甲状腺癌が出始め、95年~96年にピークとなり、その後は減少します。その一方で青年期の癌は増加傾向にあります。図①のデータからチェルノブイリ原発事故による放射能が小児甲状腺癌の激増の原因であると認知されました。これは非常に大切なグラフです。州ごとの甲状腺癌患者数はチェルノブイリ原発に最も近いゴメリ州が最多で、次がブレスト州。ミンスク州およびミンスク市が多いのは、他の汚染地域からの避難・移住者がいるためでもあります。癌の種類別では圧倒的に多いのが乳頭癌です。これはチェルノブイリでも日本でも同じです。だから



図②: 甲状腺癌の症例



写真①: 清水先生とアレーシアさん、フィリップちゃん



写真②: リュドミラ・さん(右)、娘のアンナさん

ら乳頭癌をしっかり診断できるようになればまず心配ありません。

CMNでは1997年からプレスト州の医師たちと一緒に医療活動を行ってきました(初期は州内ホットスポットのストーリン地区を拠点とし、2002年よりプレスト市へ拠点を移す)。図②は、そのプレスト州の医療チーム(診療所勤務以外に国際赤十字の医療チームとして州内で検診を行っている)が発見した甲状腺癌です。ベラルーシ全体の約1/3～半分くらいの甲状腺癌をプレスト州のチームが発見しており、医療技術の上達が見て取れます。

さきほど、甲状腺の摘出手術を受けるとネックレスのような傷跡が残ると言いましたが、切開式に代わる手術法として、日本医科大学(当時)の清水一雄先生が開発された内視鏡を用いた甲状腺の摘出手術の普及にも取り組んでいます。写真①の女性はアレーシア

さんというプレスト州ピンスク地区の出身の方で、胎内被曝をされました。家族には甲状腺癌、良性の腫瘍はなかったのですが、検査で10×15mmのしこり(乳頭癌)が見つかりました。そこで彼女を日本へ招き、清水先生が手術をされました。この術法では皮膚を切りません。針金を通して皮膚を持ち上げて空間を作り、そこへ内視鏡を入れてモニターを見ながら手術をします。

この術法であれば約6時間後には自分でトイレに行けて、ジュースも飲みます。アレーシアさんの場合は手術の翌日は安静にして様子を見て、3日目の午前中にベラルーシへ帰国されました。つまり3日あれば手術をして、退院できます。これが従来の切開式の手術をするとだいたい1週間から10日かかります。術後数年経つと、傷口は非常に分りにくくなっています。アレーシアさんはその後ご結婚され、一児のお母さんとなりました。きちんとした手術を

し、予後のフォローをしっかりとするれば、妊娠して出産できるというのが甲状腺癌です。

写真②の女性はリュドミラ・ウクライカさん。現在はミンスク教育大学で心理学の講師をやっています。彼女も15歳のときに甲状腺癌と診断され、首を大きく切る手術を受けました。そしてご自身と同じようにPTSD(心的外傷後ストレス障害)をもった子どもたちのケアをしたいということで心理学者の道を歩まれました。PTSDは、チェルノブイリでも福島でも起きていることですが、その専門的なケア、心理的ケアというのは非常に重要になってきます。

ベラルーシでは、ピテフスク州など非汚染地域を中心に国営の保養地が10ヶ所あります。ベラルーシでは、6月25日から8月31日までが子どもの夏休みです。そ



写真③：モギリョフ州の街並み



写真④：避難者に提供された一軒家



写真⑤：国際赤十字の移動検診車両

の間、日本でいうサマースクールへ保養を兼ねて子どもを預けるということがなされています。福島も全部汚染地域ではない。非汚染地域もある。そうであれば、わざわざ広島や岡山に行かなくても、福島の中の非汚染地域へ移動して保養したほうが経済的ではないかというのが私の意見です。

写真③は、モギリョフ州というミンスク州に次ぐきれいな町です。州内には原発事故による汚染のために村人が避難をして消滅した村もあり、

その村名を刻んだモニュメントがあります。なおベラルーシでは、避難者の移住先は福島のようなプレハブではありません。写真④のような家庭菜園付きの1戸建てです。またモギリョフ州にも国際赤十字の医療チームがあり、ここでは甲状腺癌と乳癌の検診をしています。受診者は元々その地域に暮らしていた住民と、事故後に移住してきた住民です。福島でも対照して調べていくためには、今後このようなモデルケースを作っていかなければいけないと

思います。

またミンスク市郊外には、白樺の原始林だったところを切り開いて避難民を受け入れたマラジェチナ市という地域があります。ここは住宅やアパートを中心に、公園、医療施設（小児科、外科、総合病院、歯科、また結核のサナトリウムなど）があり、避難民をサポートする体制を地域全体で構成した街づくりをしています。こうした事例は今後の福島にも役に立つのではないかと思います。

●第2部：山田さんを交えてのトークセッション

(進行：寺嶋悠)

●グリーンコープの概要や支援への取り組みについて

熊野：グリーンコープは食べ物から始まった生協です。鹿児島から大阪まで安全な食べ物を願う母親たちが40万人集っています。環境問題にも関心を寄せ、命と原発は共存で

きないとして、脱原発社会に向けての取り組みも継続しています。2011年の東日本大震災では、放射能測定室の開設等、発災後から現在まで支援活動を続けています。そうした中で福島で暮らす方々と出会いがあり、その苦悩や、生の声を聞くこ

とで、改めて放射能の恐怖、そして暮らす方々が翻弄されていることを知り、同じ子を持つ母親として本当に胸の痛む思いをしました。

●ヨード剤の効果について。日本は海産物から天然のヨードを摂取できる環境にあるが、福島



では子どもの甲状腺癌が問題になっている

山田:ヨード剤は医師がきちんと処方しないと過剰投与になってしまい、歯や骨に影響が出ます。チェルノブイリの場合、事故が起きる4、5年前の姿がそうでした。ベラルーシは内陸国で海藻から取れる天然のヨードが不足しています。当時現地には血中ホルモンを測定する機械がなかったため目分量でヨード剤を与えていたところ、過剰投与の問題が起きました。そのために予防的投与をやめていた、そこに原発事故が起きたため、甲状腺が放射性ヨードを取り込むことになりました。一方、ブレスト州の2km先にあるポーランドでは事故発生後にヨードの予防投与が行われたため、小児甲状腺癌は発生していません。

●甲状腺癌について。今福島で何が起きているのか、現状につ

いては様々な意見ある

山田:福島での甲状腺癌の増加については、「放射能の影響」「スクリーニング効果」と専門家の間でも意見が分かれています。検診では触診で頸部の状態を確認し、エコー検査を行います。小さい癌はどこまで診るのか、それは1cmです。これは福島も同じです。1cm以上の結節が見つければ穿刺吸引をして良性か悪性かを見極めます。現地ではそうした検診のデータが一生涯カルテとして病院に保管されます。結節が肥大化しないまま、一生涯癌の芽をもって暮らす人もいます。甲状腺癌は非常に潜伏期間が長く進行も遅い、いわゆる潜在癌。日本の場合、専門家がこのことを説明していないのが、混乱の原因のひとつだと思います。ただベラルーシと日本とでは地形の違いなどもあり、放射能の健康への影響については

現在も調査・研究が続けられている段階です。

河上:福島の甲状腺検査では、一巡目に30万人の受診者があったものの、二巡目に入ると受診率が大きく下がっています。その理由の一つは受診対象者が移住し、フォローができていないこと、そして専門家と市民の間に溝があり、専門家を信頼していないという問題もあります。ブレスト州の診療所には多くの方が検診に来られており、そこには市民と専門家の信頼関係があります。これまでのCMNの活動の経験を生かし、少しでも専門家と市民の間を近づける、また甲状腺癌や検査について正しい知識を持ってもらうことが大事だと考えます。

●山田さんは広島出身の被爆二世。原爆投下から時間が経って見えてきたことはあるか

山田:福島では市民の間で奇形の

話が出ていて非常に気になりました。広島の実験者の奇形に関してはまだ研究中です。私で二世ですから、後世に亘って調べる必要があり、まだ結論を出す段階ではない。これからも調査を続けていかなければなりません。癌についても同様です。

旧ソ連、社会主義の時代には大気汚染等の環境問題は考慮されていませんでした。各共和国にあった軍事演習場では小型の原子爆弾を使った演習等が行われていました。ブレスト州にはモスクワへと続く鉄道が走っており、モスクワからブレスト州を通して東ドイツへウランの廃棄物を運んでいました。チェルノブイリ以前のそうした環境問題にも目を向けなければなりません。

●チェルノブイリの経験を福島に返していくということについて

河上：支援をする際には、状況をき

ちんと把握して現地のキーパーソンを作るのが一番です。また私たちの活動の中では、支援する側の思い入れだけでは被災者を苦しめることもあるということも心に留めてきました。例えば保養支援では、限られた人数を日本へ招待するのではなく、現地で放射能汚染の心配のない場所を探して保養所を運営し、より多くの子どもたちを支援しました。将来的に現地の人たちの力で被災者支援ができるように環境を整備することが大切だと考えます。

山田：触診もまともにできなかったブレスト州の医師たちは、今では年間約1万人の住人の甲状腺癌検診を行っています。1カ月のうち3週間は移動検診に出かけて、1週間は内分秘診療所で従来の仕事をする。それが積み重なって25万人のカルテがある。だから我々も研究者をそこへ連れていきます。日本では国は福島だけでしか甲状腺の検診を

行っていませんが、福島へ行って声を聞くと、福島以外でもやってほしいという声が多いです。他県を含めて、健康被害を心配をされる人々のためにも、甲状腺の検診をどうかした形広げるといふこと。これは心理的にも、実際的な検査としても必要なのではないかと思います。

熊野：チェルノブイリ、そして不幸にも福島、日本でも起きてしまった原発事故を学ぶことで、教訓にしていかなければならないと思います。原発の再稼働が進んでいる現状を踏まえ、福島のことを他人事にするのではなく、自分たちに引き寄せて考え、寄り添って何ができるか考えることが大事だと改めて思いました。見えないし、匂いもない放射能の恐怖がどれだけか福島の人々の声から学ばせてもらいました。5年経って少しずつ風化しているところもありますが、折に触れて思い出して教訓にしていふことが大事だと感じます。

2016

11/19

渡會泰彦先生講演会を開催します！

ベラルーシでの甲状腺検診の現場で、臨床検査技師として10年にわたり活躍されてきた渡會泰彦先生を福岡へお招きし講演会を開催します。ご予約は電話、メール等で事務局まで。

●日時：2016年11月19日（土）13：00～16：00（開場12：30）

●会場：カンフェレンスASC・3A（福岡市博多区博多駅東1-16-25 3F）

参加費無料・定員40名
（先着順、予約優先）





たくさんのご支援を本当にありがとうございます！
チェルノブイリ被災者支援のために大切にさせていただきます。

お名前掲載について

20 16年5月1～7月31日
までに募金をして下さった方、ならびに商品購入を通じて活動を支援して下さいました。同封の振込用紙の「氏名掲載」欄で、「可」の部分へ○印をして下さった方々をご紹介します。掲載を許可される方はぜひご記入をお願いします。

なお郵便振替以外からのお振込み等については、許可が確認できなかったものとして、掲載しておりません。募金者名の掲載をご希望の場合は、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

マンスリーサポーター募集中！

月々 300円からの募金で気軽に、コツコツチェルノブイリ支援をはじめませんか？マンスリーサポーターになると毎月26日にご希望の金額がゆうちょ銀行総合口座から自動的にCMNへ寄付されます。「毎回振り込みに行く手間を省きたい」「無理なく継続的に支援を続けたい」という方にピッタリです。お申込、お問合せは事務局までお気軽にどうぞ！

事務局からのお知らせとお願い

振込 用紙は毎月同封しています。これは「思い立った時にいつでも振り込みできるように、毎月同封してほしい」というご要望があったからです。決してお振込を強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不要な方は処分をお願いいたします。

住所 を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付がご不要の場合は、お手数ですが事務局までその旨ご連絡ください。

(順不同・敬称略)

浅原望樹 石橋啓子 稲毛修子 植田清子
櫻本みつ枝 大塚厚 梶原孝子 金只律子
久保カヨ子 久保山菜摘 佐々木悦子 貞池和恵
定村洋子 渋谷けい子 白水明代 関根敏子
高橋武三 竹下拓子 田中直子 中丸直見
中村仁美 野中孝子 箱田裕司 深堀ミチ子
本田美穂子 松井由美子 めぐみ保育園職員一同
森悠子 吉田久美子 四元洋子

☆グリーンコープ生協組合員のべ1374名の方々より、4,424,000円の運営支援カンパをいただきました。心よりお礼申し上げます。

<2016年5月～7月分の寄付内訳>

活動支援金	4,802,555 円
のぞみ21カンパ	23,000 円
雪だるま3号カンパ	18,000 円
東日本支援カンパ	46,000 円
合 計	4,889,555 円

<都道府県別 / 計1452名(匿名含む)>

【青森県】 1名	【東京都】 3名	【富山県】 1名	【静岡県】 2名
【愛知県】 1名	【大阪府】 25名	【兵庫県】 15名	【鳥取県】 27名
【島根県】 35名	【岡山県】 22名	【広島県】 104名	【山口県】 122名
【愛媛県】 1名	【福岡県】 598名	【佐賀県】 37名	【長崎県】 56名
【熊本県】 182名	【大分県】 106名	【宮崎県】 22名	【鹿児島県】 92名

●マンスリーサポーターの皆さん / 計120名(匿名含む)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 植田清子 内野千鶴子
有働聡美 江原健一 延壽富美 大塚卓子 大久保伸子 大久保弘子 大崎知恵 太田昌子
大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎
君子 川崎清美 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 後藤宇企子 財津耐
代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 坂口馨子 佐々野也依 佐竹早苗 佐藤一江 佐
藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田
中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子
永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 丹羽道代 納富育代 深川哲臣
福井初子 福本勅子 藤田優子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松
永庸子 丸山さより 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 村松知子 室屋芳乃 山
下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子 渡邊真志子

http://www.cher9.to/dekiru2.htm#month

●皆さまからのメッセージ (一部抜粋)

●世界が全部幸せになりますように。●子どもたちの甲状腺がんが軽くて済みますように。●ご支援の大変さもあり、正確な報告ありがとうございます。●ヒロシマとしてフクシマと共に繋がっていただけらと思います。●ベラルーシ北部オストロペンに2基の原発建設が進んでいると新聞で読みショックを受けました。人はチェルノブイリの経験から何を学んだのでしょうか。●子どもたちのためにいろいろな活動をされ、感謝しています。少しでも助けになれるよう、私もがんばります。●支援活動が広がりますように。

編集後記

8月に開催した山田英雄さん講演会では、グリーンコープ関係者の方々を中心に100名近くの参加者がありました。日頃活動をご支援いただいている支援者の皆さまに活動を報告できる場を設けることができ良かったです。11月には臨床検査技師の渡曾泰彦先生を福岡へお招きし講演会を開催します。参加費無料ですので、どうぞふるってご参加ください！ (み)

